

みきの気持ちがよくわかる

『みきのたからものふきだし本』をつくろう

授業者 岩崎 兼司

1 本実践の教材について

(1) 本作品の特徴

本実践では、蜂飼耳氏によって書かれた「みきのたからもの」を取り上げる。本作品の特徴として以下の3点が挙げられる。1点目は、三人称限定視点でみきを中心人物に据えて書かれているが、みきの心情が十分に語られていない事。2点目は、みきがどのような人物なのか、対人物であるナニヌネノンがどんな姿や形をしているかが詳細に書かれておらず、ナニヌネノンは挿絵にも登場しないという事。3点目は、10分から15分程度で進行する物語なので、状況の変化が最後の「みきの将来の夢が決まった場面」のみであり前後の場面を繋げて人物の変容を読める事。一方でどうしてみきが変わったのかその変容の理由が一読しただけでは読み取りにくい。このように書かれていない部分が多い一方で「なんども手をふりました。」「小さな石をぎゅっとぎったまま」等中心人物みきの行動に関する描写が多いのも特徴の一つである。これらの作品の特徴から、読者の想像に委ねられる部分が非常に多いが、読者はみきの行動に着目する事で、登場人物の心情や行動の理由が読む事ができ、2人の会話の様子等に着目する事で人物同士の関係性にまで目を向ける事ができるのではないかと考える。この作品の特徴を生かし、登場人物の行動に対する「理由」からその背景にある心情等の人物の様子を具体的に想像する力を育んでいきたい。ここで身に付けた力がこの先の空所を読んだり、人物の性格や人物像を考えたりする学習につながっていく。

(2) 言語活動『ふきだし本』について

そこで、本実践では、『みきのたからものふきだし本』という言語活動を設定する。ふきだしを書いていく中で物語の様々な場面に書かれているみきの行動の叙述に立ち止まりを生み、行動の理由について解釈を検討する。その後行動の理由から想像したみきの心情を表す「ふきだし」をつけていく活動を行なっていく。このような活動を通して登場人物の行動の「理由」からその背景にある心情などの人物の様子を具体的に想像することができるようになる。しかし活動を行なっていく中で、子どもたちから「何を書いたらいいのか。」「どうやって書けばいいか分からない。」等の困り事が出てくると考える。そこで困り事の内実を子どもたち同士や全体で話し合っていく。そんな中で「なんでみきが○○したのかが分からない」等行動に対する疑問や「この時のみきの気持ちを表す言葉が見つからない」等の表現の仕方に関する困り事が出てくる。その困り事や全体の場で共有した疑問を課題として設定する。全体の場では、解釈と根拠を出し合い、話し合う事で叙述から想像した事を比べたり、繋げて考えたりする事ができるようになる。個人の解釈から叙述同士の繋がりを見いだし全体の場で考える事で、「この文章からも考えられるんだ。」等の見通しをもち、「他の文章にもふきだししがつけられそう。」という事に気付き、「ふきだしの中身」の再考が始まっていく。ふきだしを書く事を学習活動の中心に据える事でふきだしを書く事自体が問い合わせを生み出す事に繋がり、全体の場で解決していく中でふきだしの中身を再考していく。また、根拠は同じだけど理由付けの仕方で「ふきだし」の中身が全く違っている事に気付き、解釈の違いをたのしむ子どもたちになってほしいと願う。

2 単元の構想

今回の実践では、次の2点をポイントとして単元を構成する。

- 言語活動『みきのたからものふきだし本』に取り組む中で、みきの行動の理由やその背景にある心情を「ふきだし」で表し出す事で、表現のずれが顕在化しみきの行動の理由を話し合う事でみきの様子や心情を具体的に想像する事ができるようとする。
- 言語活動に取り組む中の困り事の内実を全体で考える事で課題を設定し、解釈を出し合う中で叙述同士の繋がりを見いだし「ふきだし」の再考をする事ができるようとする。

3 研究の視点に沿った具体的取り組み

(1) 「表現と理解の相互循環」を促す言語活動の枠組みのデザインと学習過程の工夫

「表現と理解の相互循環」を促すために、みきの行動の理由を話し合いみきの心情を想像する『ふきだし本』という言語活動を設定する。『ふきだし本』では、実際にふきだし本を書いていく中で、「どうしてみきは、〇〇したんだろう。」等、読者（三人称視点）に立って行動の様子に立ち止まり、ふきだしに疑問を表し出す事ができるようとする。その行動の理由を全体の場で話し合い、全体の場で取り上げた叙述から解釈を生み出す事ができるようとする。その後全体の場で話し合った事を基に、一人称視点でみきの心情を想像しふきだしを書いていく。この行き来を通して、登場人物の行動等の叙述に立ち止まり、登場人物の行動から心情を具体的に想像する事ができると考えられる。また、常に「みきの気持ちがよく分かるふきだし本を書く」という目的を意識させる事で、目的をもちながら学習材を読み、「みきの気持ちを書ききれているか？」という立ち止まりを生む事ができるようとする。

(2) 言葉による見方・考え方を働かせ「表現と理解の相互循環」を活性化させる対話の手立て

子どもたちが、『ふきだし本』を書いていく中で「どう書いていいか分からない。」やみきの行動の理由に対するお互いの「解釈のずれ」が出てくる。その困り事や解釈のずれがどうして起きているのか。子どもに解釈を語らせたり、「もし自分だったら」を出し合ったりする事で課題を設定する。そして、課題解決に入る前に、数人に考えを表出させる場を設定する。その際叙述と繋げて考える姿を価値付け、叙述と繋げて考えるモデルを示した上で課題解決に入る。課題解決の中では、子どもたちが班の中でもう一度本文を読み直したり、場面を演じてみたり、自分だったら等考える方法を選択していくながら叙述と結び付けながら課題について話し合っていく事ができるようとする。そうする事で話し合い中から新たな解釈等が出てきたり、新たに叙述と出会い直したりしていく。全体の場では、「どこから考えたの。」と根拠と結び付けて考えるよう促したり、「文章同士を繋げて考えたんだね。」等価値付けたりする事で、「私もそこから考えたんだけど少し考えが違う。」や「違う文章から考えたけど考えは同じ。」等全体での対話を通して叙述から新たな解釈が生まれていくようにしていく。

(3) 学びの自覚化と自己の学びの調整を促す言語活動と学習評価の在り方

本時の学びの振り返りには、「国語日記」を位置付ける。振り返りを記述する前に、「どんなふきだしが増えたか。」「どの叙述と繋げて考えたか」等発表させ、見方・考え方を働かせて考えた事を全体で価値付け、本時の学びを全体の場で自覚させた上で国語日記を記述させていく。また学び方について着目した記述取り上げる事で次時の課題解決への見通しをもち、ふきだしを書く活動に生かせるようにしていく。単元末には、単元全体を振り返る事で、新たな読みの方略や身に付けた力を振り返る事ができようとする。